

# IBDP「言語A：文学」に関する一考察

——学習評価を中心に——

木寺 祐貴・水田 遼介  
林 藤 成 美・山 元 隆 春

得られた成果としては、以下のことが挙げられる。

・IBDP「言語A：文学」では、知識や技能にとどまることなく、文  
化的、社会的、歴史的背景や文学的慣習に基づいて文学を探究し、  
その上で、自己の中に文学を位置づけ、文学の中に自己を位置づ  
けることが志向されていること。

・散文と詩の違いを比較して、学習者自身が「詩とはなにか」とい  
う問いを探究するなどといった課題を通して、常に「文学とはな  
にか」という問いの追究がなされていること。

・それらを実現するためにも、IBDP「言語A：文学」では、自分の  
読書体験が今の自分にもたらしめているものを振り返ったり、解読  
トレーニングにとどまらない詩を読む本当の楽しさを「身体化」  
を通して体感させたり、もとの作品と映画作品の価値観の差異に  
ついて考えたりする機会が設けられていること。

またIBDP「言語A：文学」においては、共通の評価規準や評価シ

## 1. はじめに

学力の新たな国際基準とも言われる、IB（国際バカロレア）の科  
目の一つに「言語A：文学（Literature）」がある。全人的な市民形成  
を理念とするこの教育プログラムのなかに明確に母語での「文学」  
という科目が設定されていることの意味は大きい。第五十九回広島  
大学教育学部国語教育学会においては、以下の問いをもとに「言語  
A：文学」科目の具体的な内容を吟味・検討し、カリキュラムにお  
ける「文学」の位置とその役割の考察を試みた。

・「文学」を読むことの意味の探究や、授業をつくるためのどのよ  
うな素材が提供されているのか。

・なぜ「文学」を読まなければならないか、なぜそのような作品が  
書かれたのか、といった重要な問いを考えるための材料や考え方  
がどのように提供されているのか。

システム、規準を達成するための学習方法、指導の枠組みが詳細に定められていることも特徴として見いだすことができた。そこで本稿では、IBDP「言語A…文学」における学習評価に焦点を当て、その内実を示したい。

## 二、IBDP「言語A…文学」について

国際バカロレア (International Baccalaureate; 以下 IB) は、1968年に始まった国際バカロレア機構 (International Baccalaureate Organization) が実施する国際的な教育プログラムで、共通カリキュラムの作成や共通試験の実施、国際的な基準による大学入学資格 (国際バカロレア資格) の授与などを行っている。

IBは、教育段階別に四つのプログラムで構成されている。そのうちディプロマ・プログラム (Diploma Programme; 以下 DP) は、十六歳～十九歳を対象とした大学入学資格取得のためのプログラムで、所定のカリキュラムを二年間履修し、内部評価と外部評価を合わせた最終試験に合格すると、国際的な大学入学資格である国際バカロレア資格が与えられることになる。

DPは六つの教科グループに分かれており、そのうち母語教育にあたる「言語A」は、「文学」「言語と文学」「言語とパフォーマンス」の三科目で構成される。これら三つの科目の焦点は、以下のように示されている。

・「文学」…文学批評に関わる文学的な技法についての理解を深め、

文学作品を独自に批評する力を育成すること。

・「言語と文学」…意味というものが言語によって構築されていることと、そのプロセスにおけるコンテキスト (文脈) の機能を理解すること。

・「文学とパフォーマンス」…文学分析とパフォーマンスの役割についての研究を通じて、劇文学を理解すること。

本稿で取り上げる「言語A…文学」科目は、さらに四つのパートに分かれている。「言語A…文学」指導の手引き<sup>1)</sup>より、科目の概略を後掲【表一】に示している。

本稿では、英国で現在刊行されている「言語A…文学」に関する参考書のうち、最新版である『ENGLISH A: LITERATURE COURSE COMPANION』(2012; 以下CCと表記<sup>2)</sup>)と、『Oxford IB Skills and Practice: English A: Literature for the IB Diploma』(2013; 以下S&Pと表記する)の一部を稿者が仮訳し、分析、考察を行った。

## 三、IBDP「言語A…文学」における評価の実際

IBDPの評価に対する基本姿勢は以下のように示されている。

評価は、指導および学習と一体化した要素です。DPでは、カリキュラム目標の達成を支援し、生徒に適切な学習を促すことを評価の最も重要なねらいとして位置づけています。DPでは、学校外で実施されるIBによる外部評価 (external assessment)<sup>3)</sup> および学

校内の教師が評価を手がける内部評価 (internal assessment) の両方が実施されます。外部評価のための評価課題は IB 試験官が採点します。一方、内部評価のための評価課題は教師が採点し、IB によるモデレーション (評価の適正化) を受けます。

IB が規定する評価には次の二種類があります。

・「形成的評価」(formative assessment) は、指導と学習の両方に指針を与えます。生徒の理解と能力の発達につながるよう、学びの種類や、生徒の長所と短所といった特徴について、生徒と教師に正確で役立つフィードバックを提供します。また、形成的評価からは、科目のねらいと目標に向けての進歩をモニタリングする (修正し、見極める) ための情報が得られるので、指導の質の向上にもつながります。

・「総括的評価」(summative assessment) は、生徒のこれまでの学習を踏まえて、生徒の到達度を測ることを目的としています。

DP では、主にコース修了時または修了間近の生徒の到達度を測る総括的評価に重点が置かれています。ただし、評価方法の多くは、指導および学習期間中に形成的に用いることもできます。教師はそうした評価を実施するよう推奨されています。総合的な評価計画は、指導、学習およびカリキュラム編成と一体を成すものです。より詳しくは、IB 資料『プログラムの基準と実践要綱』を参照してください。

IB が採用する評価アプローチは、評価規準に準拠した「絶対評価」です。集団規準に準拠した「相対評価」ではありません。この評価アプローチは、生徒の成果を特定の到達規準に照らし合わせ、そのパフォーマンスを判断するものであり、他の生徒の成果と比較するものではありません。

(『言語 A … 文学』指導の手引き』p. 29)

以上を踏まえ、「精読学習」パートに関する学習と、「自由選択」パート内の「文学と映画」オプションについて、評価の観点から考察を行う。

### 三十一、「精読学習」パートにおける評価

「精読学習」パートの最終的な評価は、個人口述コメントリーの成果に対する教師の内部評価によって行われる。以下は、S&P に掲載されている、個人口述コメントリーで求められる能力を学習者自身が確実に獲得していくために用意された学習課題である。一つの詩 (「急行列車」) を学習者が読み、「考察を促す設問 (Guided Question)」を受けて実際にエッセイを書き、教師からの内部評価を受けている。この一連の学習から、IBDP 「言語 A … 文学」の形成的評価の様相を取り出したい。

素材文 スティーブン・スペンダー「急行列車」<sup>iv</sup>

まず力強く、はっきりとした宣告。そしてピストンの黒い声明が

済むと、音もなく、しかし女王のように滑らかに、列車は停車場を出て行く。

会釈するでもなく、控え目に平然と、

窓外に群がる粗末な家々や、ガス工場、

それから最後に共同墓地の墓石に刻まれた死の重いページを過ぎて行く。

町を過ぎて、広々とした田舎に出ると、

列車は徐々にスピードを増して、不思議にも、

大海原に浮かぶ船のように、

輝かしい落着きを見せて来る。

ここで列車は歌いだす―最初は極く低く、

それから高く、そして遂にはジャズのように激しく――。

カーブにさしかかるとかん高い汽笛の音、

耳を襲するトンネルの音、そしてブレイキや数知れないボルトの音。

そしていつも軽やかに、空を飛ぶように、また下の方では車輪の

意気盛んな韻律が弾む。

沿線の金属的な風景を走り抜けて、

列車はけがれを知らない仕合せな新時代へ突入する。

スピードが奇妙な形や、幅広いカーブや、弾道のようにきれいな

平行線を作り出す時代へ。

遂に列車は、エンジンパラやローマよりも遠い、世界の頂上を越えて夜に入って行く。起伏する丘陵に低く流線形に走る燐の明りだけが見える。

ああ、炎を突き抜けていく彗星のように、

列車は夢うつつの境で走って行く、

小鳥の歌も、いや蜜をたたえた蕾を吹く枝もかなわない急行車列の音楽に包まれて。  
〔S&P〕 p. 29)

#### 考察を促す設問

一、スベンダー特有の語やフレーズの選択は、彼の主題への捉え方を私たちが理解するのにどのように役に立っているか？

二、この詩において語り手の思いや感情の高まりが分かるいくつかの点について、あなたはどの程度述べることができるか？  
〔S&P〕 p. 29)

#### 学習者によるエッセイと試験官によるコメント

##### 後掲【表二】参照

#### 試験官のコメント

この分析には称賛すべき点が多々ある。この生徒は示された詩に対して豊富な観点から関わっていて、主題への自らの優れた理解を示している。また、適切かつ思慮に富んだ方法で、詩の様々な細部に言及することができている。(このエッセイでは)いくつかの興味深い対比と、詩の書かれ方について明確な言及があるが、(生徒である)彼または彼女なら、列車を架空の、実在を超えた存在として扱って、このプレゼンテーションをより掘り下げて展開することもできただろう。「生活」をアートと対立するものとして

推論する傾向は、ここではあまり有効でない―解釈に興味深い点をもたらし、ジェンダーの話題に気がつくことにはなったのであるが。

その一方で、言葉と形式に対しては鋭い観点が見られる部分がある：この生徒は何か、詩人の用語選択やイメージや比喩的表現についてコメントするに至っている。一つ残念な点を挙げれば、この生徒が詩の構造と構文にもう少し言及していれば良かっただろう。分析はうまくまとめられており、段落ごとのトピックも分かりやすく書かれている：使っている言葉は明快で、概ね正確だ―所々、もう少し正確な表現が可能な箇所もあるが。最後に、生徒は二つの設問に対して、その分析の中において回答している。そして同時に、それらの質問が問うている以上のことがらについて言及し、さらに個人的な意見を示そうとしている。

評価規準 A…課題文（抜粋）についての知識と理解―四点  
評価規準 B…作家の選択についての認識―四点  
評価規準 C…構成とプレゼンテーション―四点  
評価規準 D…言語―四点  
〔S&P〕 pp. 31-32)

以上の試験官のコメントと評価が示された後、S&P 本文では、以下の示唆が与えられている。

あなたは、この試験官は公正な評価をしたと思ったか？ 与えられたコメントと成績から、あなたは最終試験があなたに明示す

るよう求めているスキルが何であるか、理解し始めていることだろう。  
〔S&P〕 p. 32)

その後、別の散文について書かれた学習のエッセイを以下の手順で読む活動が設定されている。

#### アクティビティ

- 一、これらのエッセイを注意深く読み、あなたが良い又は悪い例として印象に残ったことをメモする。
- 二、設定されていた設問を読み、自分の回答を作成して、それについて周囲の人と話し合う。
- 三、公式の評価基準を注意深く参照し、あなたが適切と思う成績を、エッセイを書いた生徒に付ける。
- 四、エッセイを書いた生徒に送るアドバイスを考える。自分が試験官になったと想定してコメントをエッセイに注釈として示したり、エッセイ全体に対して、良かった点を取り上げながら感想を書いたり、改善点を書いたりする。
- 五、自分の付けたコメントと成績と、実際の試験官が付けたものとを比較する。

まず、規準 A「課題文（抜粋）についての知識と理解」に関しては、「主題への自らの優れた理解」が示されている点が評価されていること、課題文から引用箇所を明記して主張を行うことが重視され

ていることが分かる。基準B「作家の選択についての認識」に関しては、スベンダーが「感覚に訴えるような、鮮明なイメージを用いている」ことや、「自由韻律」形式を選択したことによる効果への着目の評価されている。そして「詩人の用語選択やイメージについてコメントするに至っている」点を評価しつつも、さらなる「詩の構造と構文」への言及を求めていることから、かなり詳細に詩人の選択の一つ一つに自分なりの主張を持つことが求められていると言える。規準C「構成とプレゼンテーション」についての言及もコメントの随所に見られる。特にここでは論を展開する上でのスキル（簡潔に表現すること、憶測で論じること避ける等）が詳細に指導されている。規準D「言語」に関しては、明快で正確なことは遣いが一貫して求められていること、また、既習の文学の諸慣習（擬人法、直喩、矛盾語法、作調等）をエッセイの中で用いていることが評価されていることが分かる。この規準のうちAとBは、「精読」の過程で学習者が獲得することが求められている能力であるといえるだろう。それらを用いて自分の論を効果的にまとめ、表現することが規準のCとDでは求められている。

この評価のもう一つの特徴としては、教師からのコメントと成績を付されたフィードバックを受けて、試験官の視点を学習者自身を持つためのアクティビティが設定されていることが挙げられる。このことよって、自分の学習の成果がどのように評価されるのかということ客観的に捉え、試験に向けて自身の課題を明らかにすることができらるだろう。こうした評価者としての視点を意識させる働きかけは、「精読学習」パートだけでなく、「ジャンル別学習」パー

トの学習においても共通して見受けられる。

以上を踏まえると、国際バカロレア資格取得のための最終試験合格に向けて、試験で求められる能力を学習者が確実に自分のものにしていくためのPDCAサイクルが仕組みられた評価方法となっていることが分かる。

### 三二、「自由選択」パートにおける評価

「自由選択」パートの最終的な評価は、個人口述プレゼンテーションの成果に対する教師の内部評価によって行われる。以下、『言語A・文学』指導の手引き』（pp.86-87）より、個人口述プレゼンテーションの評価規準を一部抜粋する。

内部評価規準…個人口述プレゼンテーション（ハイヤーレベル）

規準A…課題作品についての知識と理解

・プレゼンテーションで使用した作品について生徒がどの程度の知識と理解を示しているか。

参考…「規準A」の評価レベル

評価点	レベルの説明
0	成果物は、以下に記す基準に達していない。
1～2	発表した作品の内容に関する知識と理解がほとんど認められない。
3～4	発表した作品の内容に関する知識は若干あり、表面的に理解している。

5 ～ 6	発表した作品の内容、および関連事項の一部に対する適切な知識と理解が認められる。
7 ～ 8	発表した作品の内容、および関連事項の大半について非常に優れた知識と理解が認められる。
9 ～ 10	発表した作品の内容と関連事項についての知識と理解が非常に優れている。

#### 規準B…プレゼンテーション

- ・効果的かつ適切なプレゼンテーションを行う上で、どの程度の配慮がなされているか。
- ・聴衆の関心を引きつける上で、どの程度ストラテジーが用いられているか(例えば、可聴性、アイコンタクト、ジェスチャー、補助教材の効果的な使用など)。

#### 規準C…言語

- ・言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確であるか。
- ・言語使用域(レジスター)、スタイル、専門用語の選択はどの程度適切か(この文脈では生徒による課題に適切な語彙、語調、文の構成、専門用語の使用を「レジスター」と呼ぶ)。

個人口述プレゼンテーション以外の評価においても言えることだが、このような共通の評価規準や評価システム、それまでの学習方法、指導の枠組みが詳細に定められているのがIBの大きな特徴となっている。これによってIBの授与する国際バカロレア資格の質が担保され、特に厳格な評価システムは、学習者の(卒業や大学入学

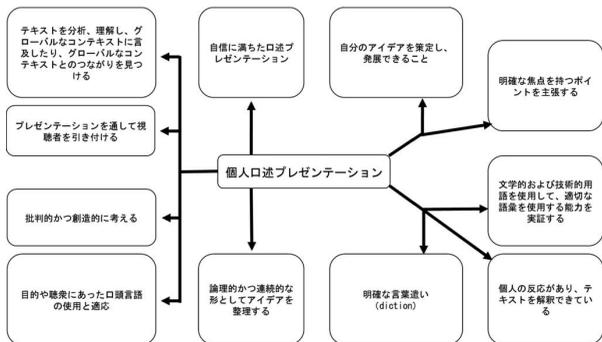
のための) 現実的で直接的な動機付けにも繋がると考えられる。ただ、それ以上に形成的評価として、学習の指針としての意味合いが強いものとなっている。OCにおいても、常に「何ができるべきか」という評価目標と「どの程度良くできるべきか」という評価規準が学習者と共有され、「できる」ようになるための実践的で具体的な方法や、考えるべき観点、企画案、プレゼンテーションの具体例からPowerPointの効果的な使い方に至るまで、学習の指針が豊富に用意されていることが大きな特徴となっている。

また、学びの成果を表現する機会が学習の最後に設けられていることが、IB全体を通しての特徴でもある。日本の国語科においても学習の振り返りやまとめとして作文を書く機会は設けられるが、IBの場合、質量ともに桁違いであることはもちろんのこと、学習者が成果発表のために学習する(学習せざるを得ない)ものとなっている。IBの中で、自分の立てた問いに対する成果発表というものは、動機付けにもなっていると同時に、解明しなければならぬというような切実さをも生んでいるといえる。

最後に、「自由選択」パート内の「文学と映画」オプションで設定されている、アクティビティの一つを示す。

一、IOP(個人口述プレゼンテーション)の評価に使用される基準をもう一度見て、それぞれの基準の個々の要素について実際に考えよう。

二、個別で、またはクラスメートと一緒に、IOPのために必要な、あるいはIOPによって成長するスキルだと考えられることを、



ブレインストーミングして書き留めよう。  
 三、最後に、それらのアイデアを何らかの図式的な形成体 (organizer) の形に整理しよう。例えば、スパイダー・ダイアグラム、ロータス・ダイアグラム (方眼型のシート)、マインドマップ、またはシンプルな箇条書きリストなど。あなたは次の図のようなものを考え出すかもしれない。

**技能と実践**  
 これらのスキルをよく見てみよう。あなたは何に気付くだろうか？これらのスキルの多くは、このコースのこのパートに関連しているだけでなく、このテーマに関連しているだけでもなく、あなたのすべての将来に役立つスキルだということが分かることだろう。このことは人生のためのスキルを開発するこのコースにおいても重要なことだ。  
 (pp. 161-162)

**四、おわりに**  
 IBDP「言語A：文学」では、詳細な共通の評価規準や評価システム、規準を達成するための学習方法、指導の枠組みによって、常に「何ができるべきか」という評価目標と「どの程度良くできるべきか」という評価規準が一貫して明確に示され、学習者と共有されていた。また、「できる」ようになるための実践的で具体的な方法、考えるべき観点、自分の考えを効果的に相手に伝える方法など、主体的に深く考え表現するための材料や考え方が豊富に用意されていた。新学習指導要領においては新しい時代に必要となる資質・能力の育成が目指され、資質・能力をベースとした「教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある」学習評価の充実が求められている。<sup>vi</sup> そうした中では、先に示した、IBDP「言語A：文学」の、評価を「指導および学習と一体化した要素」とみなし、「カリキュラム目標の達成を支援し、生徒に適切な学習を促すことを評価の最も重要なねらいとして位置づけ」る姿勢と、そのあり方は大きな意味を持つことだろう。

IBが目指そうとしているレベルは決して低くはなく、学習者の成果例を見てもその内容は高度であるが、それは学習者が優秀だからできるというわけではなく、学習者と目標を共有し、考えるための道具も豊富に用意するなど、しっかりとした足場づくりがなされているからこそなのだと感じる。

## 五、参考文献

- Hannah Tyson / Mark Beverley 『ENGLISH A: LITERATURE COURSE COMPANION』(2012) Oxford University Press
- Hannah Tyson / Mark Beverley 『Oxford IB Skills and Practice: English A: Literature for the IB Diploma』(2013) Oxford University Press
- 北村弘文「プロレタリア詩人 S. スペンダー」(1986) 東海女子大学紀要
- 国際バカロレア機関『ディプロマプログラム「言語A：文学」指導の手引き 2015年第1回試験』(日本語版)
- 国際バカロレア機関『ディプロマプログラム「言語A：文学」教師用参考資料 2015年第1回試験』(日本語版)
- 半田淳子編著『国語教師のための国際バカロレア入門』(2017) 大修館書店
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総則編」(2018)
- 文部科学省「国際バカロレアのプログラム」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/hv/308000.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/hv/308000.htm) (2018.11.28 参照)
- 注
- i 半田 (2017: p. 10)
- ii 初等教育プログラムである「PYP (Primary Years Programme)」(6～12歳)、中等教育プログラムである「MYP (Middle Years Programme)」(11歳～16歳)、「DP」16歳～19歳を対象としたキャ

リア関連プログラムである「CP (Career-related Program)」の4つ。

iii ①言語と文学(母国語) ②言語習得(外国語) ③個人と社会 ④理科 ⑤数学 ⑥芸術の六つ

iv 詩の原文は省略。なお訳は北村(1986)に拠った。

v 十点満点中

vi 例えば、個人口述プレゼンテーションは録音され、教師の採点後、IBによるモテレーション(評価の適正化)を受けることになっ

vii 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総則編」(pp. 130-131)

付記・本稿はJSPS科学研究費補助金基盤研究(A)(一般)「IBの理念を踏まえたカリキュラム・授業・評価の開発的研究」(研究代表者・棚橋健治)の交付を受けて進められた研究の成果を公表するものである。

(広島大学教育学研究科博士課程前期、広島大学)

【表一】「言語 A：文学」科目の概略

	ねらい	概要	最終評価
パート1 「翻訳作品」 (Works in translation)	<ul style="list-style-type: none"> <li>作品の内容及び文学作品としての作品の質を理解する。</li> <li>個人の文化的経験とテキストを関連付けることにより作品について独自の理解を示す。</li> <li>文学作品の中で文化的及び文脈上の要素が占める役割を認識する。</li> </ul>	<p>「パート1：翻訳作品」では、翻訳作品の綿密な読解に基づいて学習を進める。生徒はさまざまな文化の人々の異なる観点を認識し、文学作品において文化が占める役割について考察する。</p> <p>このパートでは、時代と場所の産物としての文学作品に対する理解を深めることを目標としている。生徒の作品への理解を深めるために、芸術的、哲学的、社会的、歴史のおよび伝記的考察などを取り上げる。</p>	IB 試験官の外部評価による記述課題（「振り返りの記述」と「小論文」）
パート2 「精読学習」 (Detailed study)	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習する作品についての詳細な知識と理解を身につける。</li> <li>特定のジャンルについて適切な分析的な考えを示す。</li> <li>言語の使用により特定の効果がどのように達成されているかを明らかにして示し、登場人物、テーマ、設定などの要素を分析する。</li> <li>熟考を伴う情報に基づく考えを養うため、作品の精読に取り組む。</li> </ul>	<p>「パート2：精読学習」では、作品を内容および技法の面から詳細に分析することに重点が置かれる。精読学習を達成するには、作品解釈（クロス・リーディング）と対象作品の重要な要素に関する詳細な分析を確実に行っていくアプローチが最も適している。</p>	教師の内部評価による個人口述コメントリー（口頭の論評と質疑応答）
パート3 「ジャンル別学習」 (Literary genres)	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習する作品についての知識と理解を身につける。</li> <li>学習するジャンルの文学的表現技法について明確に理解する。</li> <li>学習するジャンルにおける文学的表現技法を通じて、どのように内容が伝えられているかを理解する。</li> <li>選択された複数の作品の類似点と相違点を比較する。</li> </ul>	<p>「パート3：ジャンル別学習」では、同じジャンルから選択された複数の作品を詳細に学ぶ。各ジャンルには文学的表現技法（literacy convention）と呼ばれる技法があり、作者は特定の芸術的目的を達成するために、こうした技法を他の文学的特徴とともに用いる。ジャンル別の分類は、特定のジャンルに関連する文学的表現技法や特徴に基づいて選ばれた文学作品を比較学習する上での枠組みを提供することを意図している。</p>	IB 試験官の外部評価による筆記試験（小論文）
パート4 「自由選択」 (Options)	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習する作品についての知識と理解を身につける。</li> <li>学習する作品について、独自の考えを提示する。</li> <li>口述プレゼンテーションを通じて表現力を身につける。</li> <li>聴衆の関心を集め、興味を引く方法を身につける。</li> </ul>	<p>「言語 A：文学」の中で、「パート4：自由選択」は、教師が自分自身の興味や関心を反映した作品をコースの教材に含めたり、生徒の特定のニーズに応えたりする機会を提供することを意図している。</p> <p>特定の国や地域に特有の状況により、作品の選択が決まる場合もある。そのような状況の下では、コースで学習する他の作品とのバランスをとるために、特定のジャンルないし年代、または特定の国の作品が選ばれ、学習されることもある。地域または国の教育課程の要件を満たすよう作品を選択することも考えられる。</p>	教師の内部評価による個人口述プレゼンテーション（IB による外部モデレーションあり）

【表二】学習者によるエッセイと試験官によるコメント

学習者によるエッセイ	試験官によるコメント
<p>この詩「急行列車」は詩人スティーヴン・スペンダーによって書かれた。彼は、蒸気機関車と、それが市街から田舎へと走り抜ける様子から、詳細かつ神秘的なシーンを作り上げた。スペンダーの作調は、ある種その列車を称賛して、大いなる賛美を示すものと特徴づけられるだろう。</p> <p>①スペンダー独特の列車への称賛は、その文法形式と、比喩的表現と、感覚に訴えるイメージと、詩そのものの全体的な構造によって構築され、読者にははっきりと示される。興味深いものをひとつ挙げると、詩の列車という主題が、実は詩そのものの文章の中には直接明記されていないことがある。「列車」という語は、一度も書かれていないのだ。しかし、読者は、詩人が②特定の文法形式、この場合蒸気機関車と見なすことが大方できるような名詞の使用によって、詩の主題が列車であるとはっきり分かる。詩のタイトルである「急行列車」は、詩が列車に関するものと分かる第一の手がかりである；しかし「駅」、「彼女の笛」、「彼女の車輪」、「走り抜けて」という語を見たとき、明確に主題が列車であると分かる。これらの具体的な単語は、③通例は列車に重ねあわされるものである。そのため読者は容易に列車が主題であると理解し、詩の中で詩人が描いた④心的イメージを、構築し始める。</p> <p>⑤読者にすぐさま示されるスペンダー特有のテクニクのもう一つは、列車の擬人化であり、彼が列車を一人の女性としてはっきり描いていることだ。その列車は「彼女」という主語で示され、現実には人工的な機械である列車は、人間のようなふるまいをする。⑥その列車は「女王のように滑らかに」、「会釈するでもなく」、「歌いだす」のであり、「炎を突き抜けていく彗星」のように進み、最終的には「音楽に包まれて」いく。</p> <p>これらの表現方法と語の選択は、どちらも、⑦詩の作調に非常に大きな影響をもたらしている。列車に男性ではなく女性のアイデンティティを与えることで、スペンダーは慣例にない珍しい試みを行ったのだ。⑧通例、列車が象徴するのは産業の発展や、権力や富の拡大、一般的に男性—女性ではなく—中心的な社会の要素である。ゆえに、列車が女性として描かれることで、読者は今までと異なる観点から列車を捉えることができるのである。この詩において、もはや列車は権力や強欲さの象徴ではなく、優美さや美しさ、癒しの象徴である。⑨列車を心ある魅力的な女性になぞらえることで、読者はこのスペンダー独自の列車の姿を理解しやすくなる。；実のところこの場合、読者から見た列車は無機質な機械ではないのだ。よって、列車に対する異なったイメージと対比させてこの詩での列車の優美さと美しさを際立たせることで、スペンダーによる列車に対する称賛と賛美は非常に明確に表</p>	<p>①「独特」という語は必要か？</p> <p>②名詞は「文法形式」で言い表すのが適切か？ここでこの生徒はもっと簡潔に言うことができよう。また、詩の文への直接的言及に至るまでに段落の3分の2を要してしまっている。</p> <p>③このフレーズは避けること；「それによって読者は…」が一般的。この言い方は、私たちが単語を新鮮で驚くような方法で捉えずに、特定の意図を追って詩を読んでいることを示唆する。</p> <p>④あまりいい言い方ではない。「イメージ」を正確に説明すると何か？分析を深める余地あり。</p> <p>⑤良い話題の提示。この段落での主題を明白に表して、文章分析の根拠の確実な論点である。</p> <p>⑥引用が上手く使えている。</p> <p>⑦この生徒は、分析の観点から重要なものを抜き出している。覚えておくべき、大切な方法だ。</p> <p>⑧ここは要注意。個人の憶測に過ぎないため、論の危うさがある。</p>

れる。

物質的なシーンだけでなく、詩の中でスペンダーが彼独自の列車の描写を構築するために用いているもう一つのテクニクは、感覚に訴えるような、⑩鮮明なイメージを用いていることだ。スペンダーは詩の中に、柔らかく、美しいイメージを豊富に組み込んでいる。詩には直喩や矛盾語法や対比といった比喩的表現が用いられている。列車が「女王のように滑らかに」、「炎を突き抜けていく彗星」という部分は、直喩の2例であり、スペンダーが列車の完全なる美しさと神秘を描こうと試みていることの有力な例である。ここで挙げた2つのセンテンスにおけるスペンダーの語の選択は、大いに対照的である：女王は、⑪たいてい炎を突き抜けていく彗星と描写されることはない。彼の対照的な描写は、非常に複雑であるが誇張的な列車のイメージを生み出す。擬人的な「ジャズのように激しく」という言葉は列車の歌う様子を表現するものであり、⑫スペンダーがこの詩の中で行う描写が複雑性を高めるもう一つのセンテンスだと言える。そのため、読者は詩人が創り出そうとしているイメージを描きにくくなる。しかし、「軽やかに」「空を飛ぶように」、「輝かしい」、「明り」といった列車の描写は、極めて明快だ。⑬これらの語はポジティブで心地よいイメージを列車に与える。よって、つまるところ、スペンダーは簡潔な語選択と鮮明なイメージを組み込ませることで、列車の光り輝くような美しさと優美さを描き出すことができています。⑭彼が電車を称え、賛美していることはとても明白である。

(中略)

ディスカッションで焦点を当てるべきこの詩の最後の特徴は、詩の進行に従って、表現に速さと力強さが増していくことだ。⑮この詩は、実際の列車の動きをほぼそのまま反映させている：それは駅でゆっくりと動き始め、進むにつれて次第にペースを速め、音も力強さを増す。詩では、これと同様に、比喩表現と文法的形式の強まりが起こる。詩の冒頭では、列車はゆっくりと「停車場を出て行」き。そして列車は「徐々にスピードを増して」「不思議にも」進行していく。列車は「かん高い汽笛の音」を上げはじめ、詩の終盤に至るまでに「彼女は」「世界の頂上を越えて」行く。スペンダーは「ああ」と感嘆の声を上げ、詩の最後では列車の「歌」には何も「かなわない」と述べる。スペンダーのこの書き方の選択は、この詩が自由韻律で書かれていて通常の韻律が存在しないために読者が通例ででき得る予測をなくしているということに加えて⑯こうした力強さをはっきりと創り出している。そしてこれによって詩に楽しさが生まれ、読者は詩を楽しむことができるのである。

(『S&P』 pp. 30-31 : 下線と番号は稿者による)

⑨良い指摘だが、この生徒はそれが示されている具体的な個所を記す必要がある。このアイデアを裏付ける要素が沢山ある—としても、日常で「周知のこと」でない事柄を当てにすべきではない。

⑩良いもう一つの話題提示である。

⑪もう一度言うが、「通例」といった表現は適切でない。ほぼ確実に、「炎を突き抜けていく」という表現は、彗星以外にはあまり用いられない描写である。

⑫もう少し詳しく説明が必要。

⑬良い指摘である。

⑭この結論は、これまで既に言ってきたことを言い換えているだけ。理想をいえば、段落とエッセイに展開と前進の動きがほしい。

⑮もう一つ良い指摘がなされていて、明確でわかりやすい。

⑯ここには、詩の言葉と形式に対して素晴らしい感性が表れている。